

オルテガ・イ・ガセットに代わって来日したディエス・デル・コラル

——1961年の初来日講演に注目して——

日本大学社会学会正会員 小山義博

1 目的

この報告の目的は、スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットに代わって来日した弟子の歴史学者ディエス・デル・コラルが行った講演会について注目する。コラルは計4回（1961年、1968年、1972年、1977年）来日して各地の大学で講演を行ったが、その経緯についてはまず、「国際哲学研究会」の小島威彦が1955年にオルテガに面会し来日講演を打診するが断られ、代わってコラルを紹介され、以降2人の交流が始まったのである。初来日までに交わされたふたりの手紙のやり取りはすでに本報告者によって発表されているため、本報告では一次資料を用いて初来日講演に注目する。また、小島は晩年に長編自伝を上梓したが、晩年に書かれたゆえにその信憑性についても資料を用いて指摘する。

2 方法

そこで、データとしてふたりが交わした手紙、小島が事前にコラルに送った初来日講演の日程表、小島の直筆メモ、講演当日に使用した台本、当時の新聞記事、講演当日の写真を用いてその特徴を分析する。また、これらの分析は小島の自伝『百年目にあけた玉手箱—第7巻』（創樹社1997）にてコラル来日について詳細に書かれた内容が晩年に書かれたゆえに、その記憶の曖昧さを客観的に指摘するものとなる。特に、日本各地をめぐる行き先の行程・訪れた順番が東京での滞在を起点として東北方面と関西方面で前後しているのである。

これらの資料を比較し丹念に分析することで、コラル来日について現状ではコラルの著作の翻訳本での訳者による解説や小島の自伝においてのみ知ることができたが、その断片的な内容が詳細に浮かび上がった。

3 結果

分析の結果、来日直前に新聞に掲載された日程表が公的な観点から正しく、事前にコラルに送られた日程表は多少の変更があるものの、行き先の行程・順番は同じであった。このことから、小島の自伝が晩年に書かれたゆえにその記憶の曖昧さが客観的に分かった。また、コラルは講演題目について2つの候補から決め兼ねており小島に判断をゆだねていたことが手紙で書かれていたが、コラルが講演で用いた台本に手書きで題目の書き換えがあり最終的な題目が決定したことが見受けられ、手紙との関連性も指摘できた。くわえて、該当する講演題目を行った当日の写真から視覚的に把握もできた。

4 結論

以上から、手紙の内容と台本タイトルの書き換えの関連性の確認とその題目で行った講演当日の写真からその様子が視覚的に把握できた。そして、自伝が晩年に書かれたゆえの記憶の曖昧さも客観的に指摘できた。また、初来日までは小島のみとのやり取りであったが、来日をきっかけに多くの日本人学者（神吉敬三・鈴木成高・堀米庸三など）と交流を持つようになった。したがって61年の初来日講演は、こうした交流と新著を上梓する誘因となって68年の第2回講演を行うに至る礎石となった。